

## 『オムー』における「飲酒」擁護\*

---

齋木郁乃

---

『オムー』 (*Omoo: A Narrative of Adventures in the South Seas*, 1847) は、ハーマン・メルヴィル (Herman Melville) の散文作品の中で、最も批評的関心を集めてこなかった作品である。<sup>1</sup> 自伝的冒険譚である処女作『タイピー』 (*Typee: A Peep at Polynesian Life*) の続編として書かれたこの作品は、脱線しがちでまとまりのないストーリー、軽い調子の語り、説得力あるテーマの欠如等が原因で、若きメルヴィルの「徒弟時代の作品」とされ、低い評価に甘んじてきた (Eigner 89; Samson 496)。

しかしながら、視点を変えれば、この欠点こそが、『オムー』をメルヴィルの作品群の中でも特異な存在にしたと考えられるのではないか。確かに『オムー』は、メルヴィルの作品には珍しく、Walt Whitmanの言葉を借りれば、「読んで面白い類の読み物」であり、「軽薄だと捨て置かれるほど軽くなく、読者を疲れさせるほど深遠でもない、純粋な娯楽小説」であるという点で、大衆小説として再評価されうる可能性を秘めている (Whitman 212)。

『オムー』の軽さ/面白さは、頻繁に描かれる飲酒の場面に起因する。語り手自身が酔っ払っているため、物語全体が陽気で時に荒唐無稽な酒宴の様相を呈しているのだ。『オムー』が出版された1847年前後に数多く流通した大衆小説のジャンルの一つに、禁酒小説がある。19世紀のアメリカにおいて、禁酒運動は、奴隷制の廃止、女性の権利の擁護とならぶ、3大社会改革の一つとして位置づけられる。犯罪を呼び、労働力を低下させ、家庭の崩壊を招く過度のアルコール摂取は、植民地時代から深刻な社会問題となっていた。19世紀初頭から、主に聖職者と産業資本家が中心となって、禁酒協会を設立し、節酒を

説法する組織的な禁酒運動が展開されるようになり、1840年代にはワシントンニアン (Washingtonians) と自称する元大酒飲みたちによって、酒にまつわる教訓が大量に言語化された。John W. Crowleyによると、禁酒文学の主要なパターンの一つは、小説と自伝の境界にあるような形式の中で、大酒飲みがアルコールへの耽溺とそこからの脱却を語るというものである (Crowley 3-4)。『オムー』もこの種の禁酒小説として読むことができるのではないか。

本論は、1840年代のワシントンニアン禁酒運動の文脈の中で産み出されたテクストの一つとして、『オムー』を解釈する試みである。次の3点について順に論じていく。まず初めに、19世紀初めの聖職者による禁酒運動から、1840年代のワシントンニアン運動を経て、1850年代の禁酒法へと向かう禁酒運動の変遷を、メルヴィルが察知していたことを、『白鯨』 (*Moby-Dick; or the Whale*) の登場人物、チャリティーおばさんを通して論じる。次に、1840年代に禁酒運動を脱宗教化した、ワシントンニアンと呼ばれる禁酒運動家について、有名な禁酒講演家の一人である、ジョン・バーソロミュー・ゴフ (John B. Gough) の自伝を例にとりて概観する。最後に、メルヴィルが飲酒を、宣教師批判の道具として、またワシントンニアンのパロディとして、いかに効果的に使用しているかに着目しながら、『オムー』を禁酒小説として解釈する。

## 1. メルヴィルと禁酒運動

禁酒運動とメルヴィルの関係において、最も強調したい点は、1840年代のワシントンニアン禁酒運動の隆盛及び50年代の禁酒の法制化と、『タイピー』から『白鯨』までのメルヴィルの創作活動の時期がぴったりと重なっていることである。ハワイで発行されていた船員のための新聞である、ホノルルフレンド紙の正式名称が、*Honolulu Temperance Advocate and Seamen's Friend* (ホノルル禁酒擁護と船乗りの友) だったことも、船乗り時代のメルヴィルにとって禁酒運動がいかに身近だったか、また船乗りにとって飲酒がいかに深刻な問題だったかを示している。メルヴィルの小説家としてのキャリアが1851年出版の『白鯨』でピークに達したとすれば、禁酒運動も、同年メイン州における禁酒法の成立

で一つの頂点を迎える。

飲酒を法律で規制しようとする禁酒運動の行きすぎを、メルヴィルも鋭く感知していたのではないか、と思われるエピソードが『白鯨』の中に見られる。鯨からあぶら肉を切り取る重労働をこなしたクイーケグに、Dough-boyと呼ばれる給仕係が酒ではなく生姜湯を差し出し、スタッフの怒りを買う。

“There is some *sneaking Temperance Society movement* about this business,” he suddenly added, now approaching Starbuck, who had just come from forward. . . . “Aye, aye, steward,” cried Stubb, “we’ll teach you to drug a harpooneer; none of your apothecary’s medicine here; you want to poison us, do ye? You have got out insurances on our lives and want to murder us all, and pocket the proceeds, do ye?”

“It was not me,” cried Dough-Boy, “it was Aunt Charity that brought the ginger on board; and bade me never give the harpooneers any spirits, but only this ginger-jub—so she called it.” (*Moby-Dick* 322 イタリアック筆者)

スタッフの「こそこそと立ち回る禁酒協会運動」(*sneaking Temperance Society movement*) という言い回しは、海の上まで追ってきて飲酒を妨げる、禁酒協会の押しつけがましさを揶揄している。

また、鋸打ちの健康と安全を願って酒を禁じたはずのチャリティーおばさんは、実は金儲けのことしか考えていなかったことが暴露される。“[L]ike a sister of charity did this charitable Aunt Charity bustle about hither and thither, ready to turn her hand and heart to anything that promised to yield safety, comfort, and consolation to all on board a ship in which her beloved brother Bildad was concerned, and in which she herself owned a score or two of well-saved dollars” (*Moby-Dick* 96). チャリティーおばさんの形容詞として同語反復的に用いられる “charity” “charitable” という言葉は、船員の健康を慮るふりをしながら、しっかり金儲けをもくろむ彼女の性質、すなわちキリスト教的な慈善の押しつけを嘲笑している。メルヴィルの禁酒運動に対する態度は、社会改革としての成果を評価するというよりはむしろ、その偽善性を暴こうとする皮肉に満ちていることが読みとれる (Reynolds 39)。

1850年代に、禁酒運動が飲酒の法律による規制へと向かったことは、道徳に頼った禁酒の説得が失敗に終わったことを意味する (Reynolds 30-31)。メルヴィルは、チャリティーおばさんを通して禁酒協会の聖職者を、大酒飲みの銚打ち達を通してワシントン人たちの実態を当てこすっているという点で、禁酒運動の歴史的な節目を正確に捉えているといえよう。

## 2. ワシントン人運動

1840年4月にボルティモアの居酒屋で、6人の大酒飲みにより突如結成されたワシントン人禁酒協会は、ジョージ・ワシントンが、国家を政治的抑圧から救ったように、アメリカ人をアルコールの抑圧から救おうという意気込みで名付けられた。<sup>2</sup> 居酒屋で禁酒を誓うということだけでなく、ワシントン大統領も実は酒好きだったというのもまた、ワシントン人の内部にはらむ矛盾を暗示している (岡本78)。この運動の最大の特徴は、聖職者を中心に据えるのではなく、これまで救済の対象とされてこなかった、(元)大酒飲みたちが指導者となっていることである。つまり、ワシントン人は禁酒運動を「脱宗教化」したのである。ワシントン人たちは、宗教というよりはモラルに基づき、あらゆる階級の人々に絶対禁酒を訴え、また、パレード、禁酒の歌、プロパガンダ、誓約書に署名する儀式といった娯楽的な要素を強調した (岡本81-83)。

ワシントン人の繰り広げる運動のうち、特に人気を博したのが、元大酒飲みが、酒におぼれた悲惨な生活をグロテスクに語る見世物的な講演会だった。そのような禁酒講演家で最も有名だったのが、ジョン・バーソロミュー・ゴフである。自らの酒浸りの過去と改心を語ったゴフの自伝は、『オムー』とほぼ同時期の1845年に書かれた。ゴフは、1817年、イギリスで生まれ、12歳で単身アメリカに渡り、製本職人になった。失業を繰り返し、孤独、母の死などの度重なる不幸により、酒を飲むようになる。

I possessed a tolerably good voice, and sang pretty well, having also the faculty of imitation rather strongly developed; and, being well stocked with amusing stories, I

was introduced into the society of thoughtless and dissipated young men, to whom my talents made me welcome. These companions were what is termed respectable, but they drank. I now began to attend the theaters frequently, and felt ambitious of strutting *my* hour upon the stage. By slow but sure degrees I forgot the lessons of wisdom which my mother had taught me, lost all relish for the great truths of religion, neglected my devotions, and considered an actor's situation to be the "*ne plus ultra*" of greatness. (Gough 79)

ここでは、役者としての職を得たゴフが、役者仲間により飲酒の道へ誘われる様子が描かれている。ゴフの初舞台での役柄は、皮肉にも、アルコール飲料を出さない禁酒食堂の主人役だったのであるが（岡本88）。「無分別で放蕩な仲間たち」により酒に浸っていく代わりに、「神の偉大なる真実への関心」を無くしていく、すなわち、友情と信仰の対立こそ、ワシントンアンによる禁酒言説の核をなしている。

やがて大酒飲みになったゴフは、酒への耽溺と信仰心の回復の間を何度も行き来する。

I again became involved in a dissipated social network, whose fatal meshes too surely entangled me. . . . I felt some stings of conscience for my neglect of the Sabbath, and religious observances. I re-commenced attending a place of worship, and for a short time I attended the Rev. Mr. Campbell's church, by whom, as well as by several of his members, I was treated with much Christian kindness. . . . My desire for strong liquors and company seemed to present an insuperable barrier to all improvement; and, after a few weeks every aspiration after better things has ceased; every bud of promised comfort was crushed. Again I grieved the Spirit that had been striving with my spirit, and ere long became even more addicted to the use of the infernal draughts, which had already wrought me so much woe, than at any previous period of my existence. (Gough 89-92)

信仰は、一瞬の良心の呵責を呼び起こすものの、酔いどれ仲間と強い酒への欲望に打ち勝つための助けにはなってくれない。また、繰り返し繰り返し描かれ

る深酒の様子と、不幸になっていく家族の状況は、それ自体、感傷小説のごとく、読者を楽しませたであろうことが推測され、禁酒を勧める物語が、奔放な飲酒の描写に何頁も費やすという矛盾を読みとることもできる（Crowley 14）。

では、神への帰依ではないのなら、何が大酒飲みに救済をもたらしてくれるのだろうか。ある日、見知らぬ人に呼び止められたゴフは、酒を断つように諭される。

“Only sign our pledge,” remarked my friend, “and I will warrant that it shall be so. Sign it, and I will introduce you myself to good friends, who will feel an interest in your welfare and take a pleasure in helping you to keep your good resolutions. . . .”

Oh! how pleasantly fell these words of kindness and promise on my crushed and bruised heart. . . . A chord had been touched which vibrated to the tone of love. Hope once more dawned; and I began to think, strange as it appeared, that such things as my friend promised me *might* come to pass. (Gough 128-29)

この場面は、ワシントンニアンに典型的な、禁酒の儀式を描いている。大酒飲みへの救済は、神によってではなく、美しき友情と「あなたの幸福」を願う友人の前でサインする禁酒の誓約によってなされるのだ。

ワシントンニアン運動は、禁酒運動の担い手を、聖職者から労働者階級をはじめとする一般大衆、中でもアルコール中毒者本人に変えることにより、禁酒運動の脱宗教化と民主化を図った。<sup>3</sup> 一方で、禁酒の幫助をするべき人物がまた元の大酒飲みに戻ってしまうスキャンダルを引き起こしたり、禁酒を説くべき禁酒小説や講演の中で、過去の飲酒癖を語る部分だけが読者や観衆の関心を惹きつけたりといった矛盾をはらみ、結果的に飲酒と禁酒の区別を曖昧にするという混乱を招いた。<sup>4</sup>

### 3. 禁酒小説としての『オムー』

ワシントンニアン運動と同時代に書かれた『オムー』は、主人公の禁酒への道

のりをテーマにしているわけではないが、飲酒の様子を生き生きと描き、酒と信仰のつながりを風刺する点で、ワシントンニアン的な禁酒言説の一種、あるいはむしろ、禁酒小説自体のパロディとして読むことができる。David Reynoldsの言葉を借りれば、メルヴィルは自ら「逆説的な禁酒改革家」(the paradoxical temperance reformer)を演じて見せるのだ(Reynolds 35)。ワシントンニアンが無意識に提示してしまった飲酒と禁酒の混乱を、メルヴィルは意図的にやっつける。

まず、前作『タイピー』で描かれたタイピー溪谷を脱出した語り手は、ジュリア号の船長、Captain Guyと乗船契約を結ぶのだが、彼は物語の冒頭から酩酊状態になってしまう。“Bidding me be seated, he [the captain] ordered the steward to hand me a glass of Pisco. In the state I was, this stimulus almost made me delirious; so that of all I then went on to relate concerning my residence on the island I can scarcely remember a word. After this I was asked whether I desired to ‘ship,’ of course I said yes. . .” (Omo 6). “delirious” (せん妄状態)という言葉は、“delirium tremens” (アルコール中毒による震え、幻覚)を想起させる。実際、この船全体がアルコール中毒患者の巣窟であることが後に明らかになる。人喰い人種と噂されるタイピー族による捕囚からほうほうの体で逃げ出してきた語り手に選択の余地はないものの、酔った勢いでだまし討ちのように乗船契約を結んでいることに変わりはない。さらに、タイピー溪谷での出来事について泥酔状態で出鱈目に語った結果として、このあと「タイピー」というあだ名まで付けられてしまい、あんなに怖がっていた食人種と自らが同一視されてしまうという荒唐無稽さである。物語が始まった途端に、読者は語り手を信頼できなくなり、ピスコ(南米産の安酒)一杯で語り手の権威は失墜する。

メルヴィルは、酒を権力を覆すものとして捉えると同時に、酒自体に暴力を介した権力を付与してもいる。語り手の乗り込んだ捕鯨船ジュリア号では、既に船長のリーダーシップは有名無実化しており、代わりに無類の酒好きの一等航海士であり、後に反乱の首謀者となる、ジョン・ジャーミンが船員を仕切っている。“[H]e abhorred all weak infusions, and cleaved manfully to strong drink. At all times he was more or less under the influence of it. Taken in moderate

quantities, I believe, in my soul, it did a man like him good; brightened his eyes, swept the cobwebs out of his brain, and regulated his pulse” (*Omoo* 11). 適度な (moderate) 飲酒はジャーミンの頭をはっきりさせ、氣力を充実させるものだと、あたかも飲酒を奨励するような語り手は、続けて、ジュリア号の秩序を保っているのは、荒くれ船員たちを酔って脅しつける、ジャーミンの活力であると述べる。“[R]iotous at times as they [the crew] were, the bluff, drunken energies of Jermin were just the thing to hold them in some sort of noisy subjection. Upon an emergency, he flew in among them, showering his kicks and cuffs right and left, and ‘creating a sensation’ in every direction. And as hinted before, they bore this knock-down authority with great good-humor. A sober, discreet, dignified officer could have done nothing with them. . .” (*Omoo* 14-15). 酔ったジャーミンの「ぶちかましの権威」が、「素面で良識も威厳もある高級船員」なら手もつけられないような相手でもねじふせてしまう、という主張は、酒を断つことで良識と威厳を取り戻させようとする禁酒運動の趣旨に真っ向から挑戦し、嘲笑している。

『オムー』は、飲酒を擁護し、滑稽化するばかりではない。アルコール中毒を一種の文明病として糾弾してもいる。西欧の宣教師や軍隊、また民間の船員たちが、文明の価値観を未開の地に持ち込むことによって、原住民たちが啓蒙されるどころか墮落していく、という文明批判は、『タイピー』と『オムー』に共通するテーマである。ジュリア号の船員たちの半数が病気で仕事ができないのは、“a long sojourn in a dissipated port” (放蕩な港に長く停泊していたこと) が原因である (*Omoo* 10)。“dissipated” (歓楽、酒色に耽る) という語は、禁酒小説でも多用される言葉で、ここではアルコール中毒が性病だと推測できる。語り手はまた、「邪悪なものは全て外国からやってくる」とし、飲酒癖と、天然痘を始めとする病気が、文明によりもたらされ、原住民を何代にもわたって汚染していると主張している (*Omoo* 191)。このように、飲酒や放蕩を、文明批判の視点から、憎むべき悪として描いてもいる。

飲酒は、宣教師と、彼らが奨励する禁酒を揶揄する道具としても使われる。『タイピー』において、王のメヒビは、「ハワイ禁酒協会」の会員であるにもかかわらず常習的にちびちび酒を飲んでいることが述べられる。“He has lost



the noble traits of the barbarian, without acquiring the redeeming graces of a civilized being; and, although a member of the Hawaiian Temperance Society, is a most inveterate dram-drinker” (*Typee* 189). 『オムー』では、タヒチの王ポマレ2世も、「改宗」と同時に、飲酒癖も身につけ、犯罪まで犯しているという、ワシントンニアン（ワシントンニアン）の裏プロパガンダを地でいくような墮落ぶりが描かれる。“Though a sad debauchee and drunkard, and even charged with unnatural crimes, he was a great friend of the missionaries, and one of their very first proselytes” (*Omoa* 302). よりによって宣教師の影響で「文明化」され、飲酒するようになったと見える、二人の王を通して、南島での禁酒運動の無意味さと矛盾が透けて見える。

『オムー』では、宣教師自身の深酒にも言及されている。タヒチに住むフランス人とアイルランド人のカトリック神父が、ブランデーを大量に飲み、朝寝をし、拳句の果てにおそらく原住民の女性と遊蕩にふけているであろうことがほのめかされる。

They [the priests] looked sanctimonious enough abroad; but that went for nothing; since, at home, in their retreat, they were a club of Friar Tucks; holding priestly wassail over many a good cup of red brandy, and rising late in the morning.

Pity it was, they couldn't marry — pity for the ladies of the island, I mean, and the cause of morality; for what business had the ecclesiastical old bachelors, with such a set of trim little native handmaidens? These damsels were their first converts; and devoted ones they were. (*Omoa* 142)

宣教師にあるまじき誘惑により改宗させられるのは、原住民の女性だけではない。この直後の場面で、語り手とその友人であるドクター・ロング・ゴーストは、神父たちのブランデー接待に負けて、カトリックに改宗してしまう。カトリックとプロテスタントという大きな違いはあるものの、このエピソードは、アメリカの禁酒運動が、元々は牧師たち自身の深酒に端を発していたこと、また、1840年の大統領選挙で、有権者に酒を振る舞って票を獲得する選挙運動がまかり通っていた事実を想起させる。

『オムー』の語り手とその友人ドクター・ロング・ゴーストは、世俗化された宣教師として読むことができる。二人は、船からの逃亡者で、波止場のごろつき (beachcombers) であるにもかかわらず、タヒチを放浪するにあたり、十二使徒から勝手に拝借したポールとピーターという偽名を使い、宣教師を気取って原住民と交流する。

Arheetoo, the casuist alluded to, though a member of the church, and extremely conscientious about what Sabbath he kept, was more liberal in other matters. Learning that I was something of a “mickonaree” (in this sense, a man able to read, and cunning in the use of the pen), he desired the slight favor of my forging for him a set of papers; for which, he said, he would be much obliged, and give me a good dinner of roast pig and Indian turnip in the bargain. (*Omoa* 164)

“mickonaree”は“missionary”の現地語化したもので、「宣教師」の意から、ただの「読み書きのできる白人」という意味になってしまっている。つまり、波止場ルンペンと宣教師の間に境界線はなく、しかも、改宗した「神学者」である原住民にとっても、宣教師とその他の白人の見分けがつかないところがおさら滑稽である。実際、ポール（語り手）とピーター（ロング・ゴースト）が放浪しながらすることは、行く先々で酒と食事を供してもらふことと、原住民の女性を物色することのみ。宣教師にはあるまじき行為なのだが、直前に引用したカトリックの宣教師のしていることの反復でもある。John Samsonが指摘するように、メルヴィルはピーターとポールを宣教師になぞらえるだけでなく、彼らの宣教師らしからぬ無鉄砲な不道徳行為を楽しんでもいる (Samson 498)。

偽宣教師、ポールとピーターは、酒の力を借りて、宣教師がなしえないような原住民との心からの交流を可能にしたりもする。

[A]fter a while, Long Ghost, who, at first, had relished the “Arva Tee” as little as myself, to my surprise, began to wax sociable over it, with Varvy; and, before long, absolutely got mellow, the old toper keeping him company.

It was a curious sight. Every one knows, that, so long as the occasion lasts, there is no stronger bond of sympathy and good-feeling among men, than getting tipsy together. . . .

Fancy Varvy and the doctor, then; lovingly tippling, and brimming over with a desire to become better acquainted; the doctor politely bent upon carrying on the conversation in the language of his host, and the old hermit persisting in trying to talk English. (*Omoo* 274)

“Arva Tee” と呼ばれるどぶろくのような現地の酒を酌み交わしながら、頑固なタヒチの老人とロング・ゴーストがうち解けていく。酔うほどに、外国語を話す舌もなめらかになっていき、酒のもたらす仲間意識が強調される。ここでは、「飲み仲間」こそ、禁酒運動の味方でもあり、敵でもあるという、ワシントンニアン禁酒運動の抱えていた矛盾が重なって見えてくる。ワシントンニアンは、二人一組で講演の旅に出ることを好んだことから (Crowley 9)、語り手とロング・ゴーストにワシントンニアンの禁酒講演家の姿を重ねるのは深読みだろうか。ワシントンニアンは“missionaries”という教会を思わせる言葉より“delegates”という宗教色を排した呼称を好んだが (Crowley 9)、彼らが『オムー』の二人の放浪者と同様に、禁酒及び飲酒の伝道師であることには変わらない。

以上のように、『オムー』では、飲酒が、肯定的にも否定的にも取り扱われ、あるときは権力を形づくると同時に脅かすものとして、またあるときは禁酒運動やその中心となっている宣教師を揶揄する道具として利用されている。メルヴィルは、一方では文明によってもたらされた飲酒の習慣が未開の社会に引き起こす弊害を真剣に論じ、他方ではアルコールに起因する暴力や酒にまつわる滑稽な出来事を読者に見せて楽しませることの方に力を注いでいるようでもある。禁酒講演家のゴフが、禁酒を説きながらも、アルコール中毒時代の荒唐無稽な挿話で観衆を楽しませて生計を立てていたように、メルヴィルもまた、禁酒ではなく飲酒を擁護することにより、読者を楽しませると同時に、1840年代の禁酒運動が、禁酒と同時に飲酒のプロバガンダにもなっていたことを、鋭く洞察していたのではないだろうか。

『オムー』は、一つには禁酒/飲酒の二項対立を危うくする点で、もう一つには物語の背景を文明社会における家庭から未開の地に移した点で、禁酒文学の枠組みを広げたともいえる。Karen Sánchez-Epplerが指摘するように、禁酒小説というジャンルは、センチメンタリズムに依拠し、家庭という場の持つ道徳的な説得力を利用して、一般大衆の精神を変容させようとする (Sánchez-Eppler 65)。感傷小説が、読者にキリスト教的教訓を与え、国家を神の国へ近づけることを目指しているとするれば (Tompkins 149), 『オムー』は、社会を善へと導くはずのキリスト教的価値観が、世俗化した宣教師を介して未開の社会を墮落させているという事実に対して強烈な批判をあげている。<sup>5</sup> メルヴィルが訴えるのは、感傷的な涙ではなく、皮肉な笑いである。感傷小説ないしは禁酒小説がよりどころとするキリスト教のイデオロギーそのものを転倒させることで、『オムー』は、禁酒小説の枠組みを利用しながら、そのジャンル自体を批評しているのだ。

\*本稿は、中・四国アメリカ文学学会第33回大会 (2004年6月19日、島根大学) での口頭発表に加筆修正を施したものである。

## 注

<sup>1</sup> James L. Machorは、2004年から過去40年に遡って MLA Bibliographies の記載論文の数をメルヴィルの小説ごとに数え、『オムー』論が最も少ないことを証拠としてあげている (53-54)。

<sup>2</sup> 1826年から60年までの禁酒運動については、Joseph R. Gusfield, ワシントン禁酒運動については、岡本77-101, Crowley 1-28, 1840年代の禁酒小説については、森岡25-60を参照。

<sup>3</sup> アルコール中毒者同士が助け合うワシントン運動の精神は、現在のアルコール中毒患者救済協会 (Alcoholics Anonymous) にも引き継がれている (Gusfield 129, 岡本80)。

<sup>4</sup> ワシントン最大の醜聞は、John B. Goughが1845年9月に1週間行方知れずになり、ニューヨークで酒に酔い娼婦に介抱されているところを発見されるとい

う事件である (Crowley 14-15)。

<sup>5</sup> 感傷小説をこのように一枚岩的にとらえることには異論があろう。少なくとも、感傷小説を、メルヴィルをはじめとするいわゆるキャンノン作家の作品よりも劣ったものと位置づけているのではないことを強調しておきたい。Tompkinsも述べている通り、19世紀の家庭小説は、女性の視点から文化を再構築しようとする試みであり、ときとしてホーソンやメルヴィルよりも痛烈なアメリカ社会批判を敢行している (Tompkins 124)。

### 引用文献

- Crowley, John W., ed. *Drunkard's Progress: Narratives of Addiction, Despair, and Recovery*. Baltimore: The Johns Hopkins University Press, 1999.
- Eigner, Edwin M. "The Romantic Unity of Melville's *Omoo*." *Herman Melville: Critical Assessments*. Ed. A. Robert Lee. Vol. 2. Mountfield: Helm Information, 2001. 89-100.
- Gough, John Bartholomew. *Autobiography and Personal Recollections of John B. Gough, with Twenty Six Years' Experience as a Public Speaker*. 1845. Springfield: Bill, Nichols & Co., 1870.
- Gusfield, Joseph R. "From Social Control to Moral Regeneration: Temperance, Status Control, and Mobility, 1826-60." *Ante-bellum Reform*. Ed. David Brion Davis. New York: Harper & Row, 1967. 120-39.
- Machor, James L. "Reading the 'Rinsings of the Cup': The Antebellum Reception of Melville's *Omoo*." *Nineteenth-Century Literature* 59.1 (2004): 53-77.
- Melville, Herman. *Moby-Dick; or the Whale*. 1851. Evanston and Chicago: Northwestern University Press and the Newberry Library, 1988.
- . *Omoo: A Narrative of Adventures in the South Seas*. 1847. Evanston and Chicago: Northwestern University Press and the Newberry Library, 1968.
- . *Typee: A Peep at Polynesian Life*. 1846. Evanston and Chicago: Northwestern University Press and the Newberry Library, 1968.
- Reynolds, David S. "Black Cats and Delirium Tremens: Temperance and the American Renaissance." Reynolds and Rosenthal 22-59.
- Reynolds, David S. and Debra J. Rosenthal, eds. *The Serpent in the Cup: Temperance in*

- American Literature*. Amherst: University of Massachusetts Press, 1997.
- Samson, John. "Profaning the Sacred: Melville's *Omoo* and Missionary Narratives." *American Literature* 56.4 (1984): 496-509.
- Sánchez-Eppler, Karen. "Temperance in the Bed of a Child: Incest and Social Order in Nineteenth-Century America." Reynolds and Rosenthal 60-92.
- Tompkins, Jane. *Sensational Design: The Cultural Work of American Fiction 1790-1860*. Oxford: Oxford University Press, 1985.
- Whitman, Walt. "Unsigned Notice." *Herman Melville: Critical Assessments*. Ed. A. Robert Lee. Vol. 1. Mountfield: Helm Information, 2001. 212.
- 森岡裕一. 『飲酒 / 禁酒の物語学—アメリカ文学とアルコール』. 大阪大学出版会, 2005.
- 岡本勝. 『アメリカ禁酒運動の軌跡—植民地時代から全国禁酒法まで』. ミネルヴァ書房, 1994.

## Synopsis

### *Intemperance Advocate in Omoo*

Ikuno Saiki

Herman Melville's second novel, *Omoo* (1847), has been paid relatively little critical attention due to its light, incoherent, and digressive narration and lack of "highbrow" thesis. Those defects, however, turn out to be advantages if it is regarded as popular literature. As Walt Whitman puts it, *Omoo* is "the most readable sort of reading" and "thorough entertainment" (212).

This essay is an attempt to reevaluate *Omoo* as one of the popular literary genres at the time, temperance literature. In the early nineteenth century, local Temperance societies established by churches and ministers exercised initiative in enforcing abstinence. By the time when *Omoo* was published, however, the temperance movement had been secularized and taken over by Washingtonians, ex-drunkard reformers, who tried to persuade their fellow alcoholics to dry out by confessing their own conversion experience through lectures and autobiographical narratives. *Omoo* can be read as a variety of the Washingtonian confessions.

Melville's literary career from *Typee* to *Moby-Dick* developed as the leadership of Temperance movement was passed from religion to morals, and then from morals to laws. *Moby-Dick* was published in the same year when so-called Maine laws were enacted. The fact that the novel contains a caricature of Temperance society and Washingtonians in the characters of stingy Aunt Charity and alcoholic harpooners suggests that Melville was aware of historical transition of Temperance movement and considered it with abundant irony and sarcasm.

Temperance narratives are defined as "first person alcoholic confessions" in which "inebriates recounted their enslavement to, and subsequent emancipation from, King Alcohol" (Cowley 3-4). John B. Gough's autobiography is a typical example of Washingtonian temperance novels

in 1840s. There was a paradox in Washingtonian temperance discourses: Readers were more entertained by the display of the author's past intemperance than by his sincere plea for temperance.

Melville purposely practiced this Washingtonian confusion of temperance and intemperance in *Omoo*. From the very beginning of the story, the narrator became "delirious" from a glass of spirituous liquor so as to motivate the whole plot by alcohol (6). More than half of the crew is a drunkard, and the novel is full of descriptions of excessive drinking. The order on the ship was kept by "these bluff, drunken energies" of the first mate, John Jermin (14). Only the "knock-down authority" of alcohol can control those rough sailors on board (15).

While *Omoo* advocates *intemperance* as a resource of entertainment and authority, it also makes use of *intemperance* as a tool to criticize missionaries and their temperance reforms. Melville portrays how the missionaries degrade Tahitians and themselves by alcohol. The narrator and his friend, Doctor Long Ghost, who christen themselves Peter and Paul and are called "mickonaree," can be interpreted as secularized missionaries. Their dissipated behaviors mock corruption of priests and ministers.